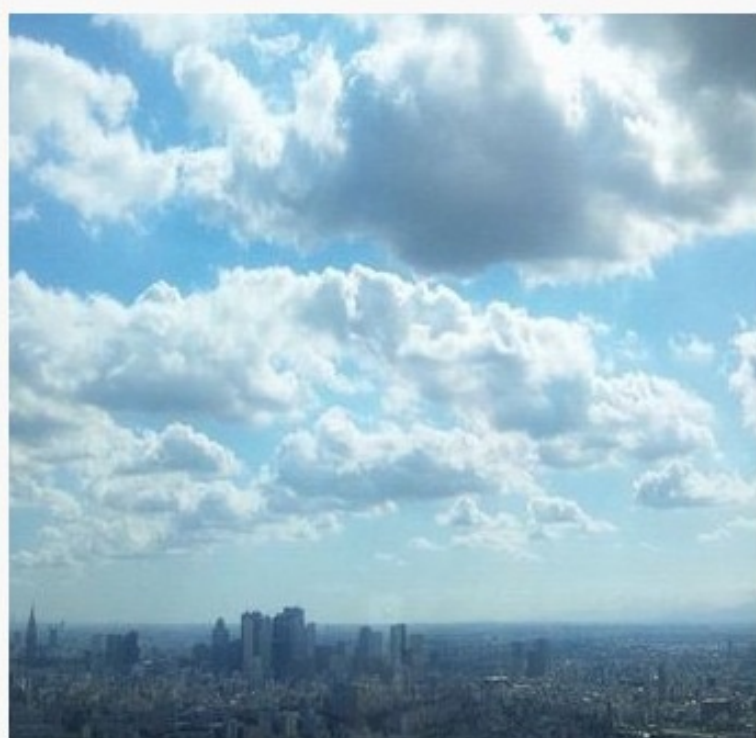


君の気持ち、流れる空気



雪月

「ちゃんと空気読んでくれよ」

そう言われて顔を上げると、彼が私の方を見ていた。

修学旅行の集団行動はいつの間にかバラバラになっていて、今は私と、私が密かに想いを寄せている彼、おそらく彼が惹かれている彼女の3人で歩いていた。

彼女の方も彼に気があるらしく、ずっと彼に話しかけ続けている。

気を使って少し離れていたつもりだったけど、邪魔だったのかもしれない。

「ごめん！」

そう言って、その場から走って逃げた。

生まれて始めて来た知らない町。

とにかくあの二人から遠いところに行きたかった。

しばらく走ると、見晴らしのいい高台の公園に出た。

はぁはぁと息をしながら、柵に両腕をあずけて町並みを見下ろす。

夕日に照らされた景色は、ただただ美しかった。時おり吹く風は、汗ばんだ額に心地よかった。

なのに、気持ちは落ち込むばかりだ。

「やっちゃったかな」

彼に好かれなくても、嫌われたくはなかったのに。

失恋...なんだよね。

ため息をついて、腕に顔を埋めた。

すると後ろから、

「お...まえなあ。...流れてない方の、空気を読むなよ」

彼の声がした。

驚いて振り返ると、彼がぜいぜいと肩で息をしながらこちらに歩いてくるところだった。

「探してくれたの？」

私の言葉に、当たり前だと答えながら、彼が隣に立つ。

「おー。良い景色じゃん」

そう言って伸びをした彼の首筋に、汗が光った。

「あいつのマシガントークに困って一生懸命お前に助けてサイン送ってんのに、そういう空気は読まないんだもんなー。拳げ句の果てに、あいつと二人で残しやがって。だから俺も、お前を探すって言い捨てて逃げてきた」

言うだけ言うと彼は、さ、戻ろうぜと踵を返す。

マシガントーク？ 彼女のあれは、そうじゃなくて...

思わず笑ってしまう。

「君も相当空気が読めないねえ」

私はそう言って、彼の背中を追いかけた。

